えてきた影響について，概観的ながらも，現時点までの変遷を示すとともに，各国間の比較の材料を提示している。同時に，「ガバメント」「ガバナンス」という視点を入れ，行政サービスという観点から，中央と地方，政府と多元的な主体との関係がどう変容してきたかを明らかにしようと努めた。東南アジア各国では，各国ごとの試行錯誤はあるものの，政府における「ガバメント規律」強化への取り組みと同時に「ガバナンス」手法の導入を試みるという流れができつつあることが一般的結論として読み取れる。ただし，「ガバメント」「ガバナンス」の解釈と定義が，第1章と他章とで必ずしも同一ではないため，編者の意図した「誰の資源を用いて，誰が公共サービスの中身を決め，それをいかに配布するのか」について，各章の分析にばらつきや濃淡が出てしまった点が惜しまれる。

最後に，本書の課題として2点挙げたい。第1に，財政負担軽減という理由から，政府自身に多元的な主体へ行政サービスの一部を補完してもらう「ガバナンス」の需要がある点を考慮する必要がある。インフラ整備など中進国化に伴う財政需要は増大する一方，それを賄う税収の伸びも外国援助供与も期待できないなか，政府には歳出における「集中と選択」が一層必要になる。取引費用の大きい住民サービスは中央から地方へ委譲し，現場では住民団体やNPO/NGOにコストシェアリングを求める事業が一般化している。このような観点から「ガバメント」と「ガバナンス」の関係を分析する必要もあると考える。

第2に，インドネシアのイスラーム組織，タイの仏教界，フィリピンのキリスト教会などの既存組織がこれまで社会のなかで果たしてきた役割を，単に政府による行政サービスの補完と捉えるのではなく，より積極的に「ガバナンス」に含めて考える視点である。元来，各国とも行政サービスは量的に不十分であり，セーフティネットの面からも，これら組織が住民に身近な現場で教育・保健・金融など種々のサービスを提供してきた。中進国化に伴ってサービス需要が質量ともに増えると予想されるなか，これら組織の役割は従来とどう変わるのだろうか。これは，ほぼすべての公共サービスを政府が提供し，それが瓦解し始めた日本における「新しい公共」の議論にも繋がるものであると考える。

（松井　和久・JACビジネスセンター）

黄蘊．『東南アジアの華人教団と扶鸞信仰——徳教の展開とネットワーク化』東京：風響社，2011, 352p.

本書は，マレーシアやタイを中心に東南アジアで拡大を続ける華人教団「徳教」を事例に，移民による宗教創出のダイナミズムを文化人類学的に探求した力作である。著者が平成19年度に大阪大学に提出した博士論文『華人教団徳教の人類学的研究——マレーシアにおける移民と宗教のダイナミズム』を加筆・修正したもので，2003～08年にマレーシア，シンガポール，タイで断続的に行った調査とその後の補足調査に基づく。

まず，本書のキーワードである「扶鸞」について，「まえがき」等に基づき整理しておきたい。扶鸞（扶乩）は，志賀［2003］が「中国のこっくりさん」と表現した通り，自動筆記による中国伝統の交神術を指す。扶鸞では，柳の枝で作った「乩筆」を1～2人の霊媒（乩掌）が支え持ち，盤上に字を書くことで神託を得る。そのメッセージは通常，深遠な詩文の形式でもたらされる。子供たちが放課後に興じる日本の「こっくりさん」とは異なり，扶鸞は言わば高次の文字文化に属するもので，その権威性と神秘性が知識人をも魅了してきた。明清以降の中国においては，扶鸞の神託が「善書・鸞書」として広範に流布し，道徳教化の役割を果たした。さらに，清末民初には，社会的危機を回避する（救劫）ために，神託に従い組織的な善を実践する扶鸞結社運動が中国全土で巻き起こり，そこからいくつかの新興教団（著者は「民間教派」と呼ぶ）も生まれた。

徳教はこうした流れのなか，1939年に広東省東部の潮州で創設された扶鸞結社である。第二次世界大戦後，徳教は中国の社会主義化とともに活動停止を余儀なくされ，マレー半島やタイの華人社会に拠点を移した。そこで儒教・仏教・

道教・キリスト教・イスラーム教の「五教同宗」を唱え，祭壇には儒教・仏教・道教の神々を奉じ，扶鸞と慈善活動を中心に，商人層を核とする華人大衆のさまざまな需要を満たし，組織的拡大を遂げた。徳教団体は今日，マレーシアでは100，タイでは80を超え，トランスナショナルなネットワーク化も起こっている。

しかし本書で詳述される通り，徳教は教団としての理論基盤が脆弱で，宗教団体と定義するには不確定な要素がつきまとう。著者は徳教を「地域社会に点在する廟と制度化した教派宗教の中間に位置する」（p.21）とする一方，「完全な意味の宗教教団と一般の華人アソシエーションの中間」（p.46）とも評する。本書は，こうした宗教と世俗要素が混合した「あいまいな」教団形態を持つ徳教がローカルな文脈の中で立ち現れてくるプロセスを，序章に続く6章と終章を通して考察した。

序章では，著者の問題意識を示し，移民と宗教，エスニシティをめぐる研究の枠組みを概括した後，東南アジアにおける華人宗教に関する先行研究を整理し，本書の課題を明らかにする。著者は，先行研究では徳教の特殊性とその背景となる社会状況，展開を可能にした社会的文脈が十分論議されていないと指摘した上で，徳教の展開を移民による宗教創出のプロセスと捉え，移民がいかにローカルな社会状況に合わせ，大伝統なる文化要素を取捨選択しながら自らの宗教を創出してきたのかというダイナミズムを解明すること，および華人のスピリチュアリティの探求を考察することを目的として挙げる。

第1章「徳教の前史――扶鸞結社と徳教」では，徳教が生まれた社会背景を検証するため，近代中国における道徳教化，慈善と宗教との結合および清末民初の扶鸞結社運動，徳教が生まれた潮州地方における慈善と宗教との結合の社会的土壌について概観した後，1939年の誕生から1949年までの徳教の組織的拡大や活動状況をたどる。

清末民初に起こった救劫論のなか，潮州ではローカルな大峰祖師信仰と結びついた慈善結社「善堂」が数多く設立される一方，既存の宗教結社の善堂化が進み，徳教も慈善活動の展開に乗り出した。また，初期の徳教の創設に貢献した「儒商」（儒教的教養を持つ商人）による論説や経典によって，徳教は扶鸞結社から脱皮し，独自の理論や世界観を構築した。

第2章「東南アジアの華人コミュニティと華人民間教派の展開」では，マレーシア，シンガポール，タイにおける華人コミュニティの変遷を概観する。次に，マレーシアの華人民間教派（教理体系を明確な形で備える教団。道院紅卍字会，一貫道等）の歴史と現状を示し，徳教も含めて類型分類を試みる。

著者によると，マレーシアの華人民間教派は，改革に成功した一貫道を除いて勢力を失っている。華人民間教派の基軸が「内修＝修行」と「外修＝慈善」であるのに対し，徳教には内修が欠如する。内修を必要としないことが間口を広げ徳教の拡大を可能にしたとも言えようが，近年，それに反し理論建設を強化しようとの動きが出ているという。

続く第3章，第4章では，著者が主要調査地であるマレーシアで実施した関係者へのインタビューの結果が反映されている。第3章「マレーシアにおける徳教の教団的展開」は，同国の徳教の組織的拡大，活動を見るとともに，参加者たちの思惑，行動に焦点を当て，教団のメカニズムとその背後にある社会状況を明らかにする。

マレーシアの徳教には五つの系列がある。潮州から直接伝わった「紫」系列以外は，マレーシア生まれの扶鸞結社が後に徳教の連合組織に加入したものだ。これに関し，著者は，徳教は積極的に類似組織を取り込み統合することで拡大してきたと指摘する。次に，ペナンの「紫雲閣」を取り上げ，参加者の語りを分析する。

第3章の考察を受けて，第4章「徳教と潮州人性，商人イデオロギー，または神意」では，徳教と潮州人コミュニティ，潮州系商人との関係性，慈善の意義，神権などについて議論を展開する。

著者は，徳教の特性として，「潮州人性」と「商人イデオロギー」および「扶鸞を介した神意」を挙げる。著者によると，徳教は一般の華人任意団体と同じ権力構造を有し，商人層が絶対的な力を持つ。商人イデオロギーは徳教の世俗性の顕著な表れである。また，潮州系商人のネットワークは，今日でも徳教の発展にとって重要な「資産」とされる。

扶鸞の神意に関する問題は，続く第5章「徳教の教団イデオロギーをめぐる論争と理論建設」でも検討される。著者が繰り返し指摘するように，徳教には教団としては多くの不備が見られるが，それに対して，内部から変革を求める声が出ている。路線変更は，まず1960年代末に「扶鸞の廃止」をめぐる論争として現れた。徳教団体は「扶鸞推進派」と「扶鸞廃止派」に分かれ，結果的に推進派が多数を占めるに至ったが，扶鸞の権威や信憑性にまつわる対立は解消されていない。

もう一つの問題である教理建設では，さらに意見が分かれ，一部の団体は，理論化による徳教の近代宗教化を主張している。こうした宗教性の強化をめぐる問題は，「徳教は宗教か」という存在に関る論争にまで発展した。普遍性を強調し，「道徳」「宗教を越えるもの」とする主張が強まっているが，統一した見解には至っていない。

第6章「徳教のトランスナショナルな拡大とネットワークの構築」では，近年盛んになっている徳教のトランスナショナルな教団展開とネットワークについて考察する。著者は，ネットワーク化と組織の拡大性こそが徳教の本質的な性格であり，海外布教や世界大会の開催などトランスナショナルな展開は，関係者の危機意識や教団変革への期待感の反映であると同時に，徳教の展開バージョンとして必然的な動きだと分析する。

終章では，以上の議論を「華人教団の特殊な一形態」「移民による宗教の創出」「信仰の意識化」「スピリチュアリティの探求」という四つの観点から総括し結論を述べている。

評者はこれまで，タイをフィールドに潮州系の華人慈善団体の生成やネットワーク形成について調査してきた。徳教は直接的な調査対象ではないが，本書のテーマは評者の関心領域と重なり，示唆するところが大きかった。東南アジアの華人宗教に関する先行研究には相当の蓄積はあるが，ある信仰が組織化される動的なプロセスを分析した研究は多いとは言えない。そのなかで，徳教という教団としての位置付けが難しい組織を取り上げ，広範かつ地道なフィールドワークを通して，アクターのさまざまな交渉の中で立ち現れるダイナミズムを描き出したことは本書の大きな意義であろう。その上で，以下，評者なりに感じた点をいくつか述べてみたい。

第一に，著者は，徳教の展開をローカルな社会的文脈のなかで探求する必要性を強調するが，本書には，ホスト社会が持つ宗教的文脈からの考察が少ないように思われる。そのため，徳教がホスト社会でいかなる位置づけにあるのかが今ひとつ伝わってこない。

例えば，上座仏教が社会的規範の基礎をなすタイでは，「タンブン（喜捨）」の慣習が華人系慈善組織がタイ社会から広く受け入れられる要因となっている。著者はタイの徳教では善堂など類似の潮州人団体を吸収する動きがあるとする（p.207）が，その一方で，タイでは善堂が大きな影響力を持ち，徳教とは別の類似組織も確固として存在する。マレーシアで現地生まれの慈善扶鸞結社が徳教の系列として吸収されたのに対し，タイでは異なる状況にあるのは，やはり両国の社会的・宗教的文脈の違いに理由が求められよう。

第二に，著者は，徳教を制度化された教派宗教と廟の中間に位置する存在と見なし，特にマレーシアについて民間教派と比較する一方，新興仏教教団については言及するに止まる。しかし，マレーシア各地に拠点を網羅する台湾の慈済基金会等の新興仏教団体は，第2章（p.136）で触れられる「信者争奪」には当然関わってくる存在であろう。ローカルな社会で徳教とこれらの団体がいかに対抗しているかについても考察があれば，徳教の置かれた社会的文脈がより明確になったのではないだろうか。

第三に，第4章で提示される「潮州人性」「商人イデオロギー」，というキーワードについて，定義が明示されていないため，具体的に何を指すのかわかりにくい。「潮州人性」が「華人性（Chineseness）」に準ずるサブ・エスニシティのレベルの概念であることは理解できるし，徳教の拡大に潮州人ネットワークが重要な役割を果たしたことは間違いないだろう。しかし，本書の「潮州人性」は，ある箇所では「潮州語を話すこと」，あるいは「潮州系商人のネットワークそのもの」を指し，別の箇所では「構築」されるエスニシティ

を指すように読み取れる。「商人イデオロギー」も，やはり著者の意味するところが明確ではない。これらを徳教を特徴づける重要な要素とするならば，著者の定義を示す必要があったのではないか。著者はまた，潮州人について，「相互の結合と組織的連携をもっとも重視する」とともに「教育の推進，エスニック文化の継承を重視することで知られる」とする（p.102）。これらは，著者の実感でもあろうが，他の方言集団にもある程度当てはまることではないか。違いがあるのならば，その根拠やいかにして生じたのかという考察がほしかった。

このほか，序章で目的として挙げられた扶鸞とスピリチュアリティに関する分析が，終章でまとめられているのみなのは，少々残念に思われる。著者が「あとがき」で述べている通り，扶鸞には科学では証明できない魅力がある。著者の徳教研究がさらに進み，著者が目指す通り，移民研究および現代におけるスピリチュアリティ研究にまで成果が広がることを期待したい。

（玉置充子・拓殖大学海外事情研究所）

言及文献

志賀市子．2003．『中国のこっくりさん――扶鸞信仰と華人社会』大修館書店．

樫永真佐夫．『黒タイ年代記――「タイ・プー・サック」』（叢書　知られざるアジアの言語文化5）東京：雄山閣，2011, 163p.

黒タイの年代記『タイ・プー・サック（父祖の征戦物語）』を紹介・翻訳した本書は，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の叢書シリーズ「知られざるアジアの言語文化」の第5冊目である。本叢書は，自らの国家をもたず，近代領域国家の周縁に置かれている少数民族が自身の言葉で語った口頭伝承や文献を和訳して紹介しようとするシリーズである。但し，アジアと言っても現在刊行されているものは，中国雲南から大陸東南アジア北部にかけての，近年，独自の歴史・文化を持つ「タイ（シャン）文化圏」として知られるようになってきた地域のものである。本書は，その中でも特に研究蓄積が少なかった黒タイの年代記を扱った貴重な業績である。著者は，人類学者として黒タイ村落において長期の滞在型臨地調査を行う一方，黒タイ出身の研究者カム・チョンに長年師事して黒タイ文書の文献研究を進め，多くの文献の翻訳・注釈などを発表してきた。評者も，黒タイが居住するベトナム西北地方を対象に歴史研究を行っており，ベトナム留学中には同じくカム・チョンの下で学んだ言わば弟弟子であるが，先生のカム・チョンをはじめ，調査先の黒タイ村落などで，常々著者の黒タイ語の言語能力の高さと黒タイに関する該博な知識に対する評判を聞くにつれ，それに比しての自分の非才に恥じ入るばかりであった。このような不肖の弟弟子であり，日頃よりその学恩を受けている評者が，著者の作品を評するのは甚だ僭越とは知りつつ，研究対象を同じくしながら歴史学という異なるディシプリンに身を置く人間として，あえて筆を執らせていただく。

本書は，解説，年代記テクスト日本語訳・注，コラムの3つの部分からなっている。年代記の内容紹介を兼ねて解説部分を紹介すると，まず「黒タイの文化的特徴」「村落生活の現状」（「　」内は節タイトル。以下同）で，著者の臨地調査の経験をふまえ，黒タイ社会の基本的なイメージがつかめるように配慮された記述がなされる。続く「文字文化」においては，黒タイ文字文書及び識字についての説明を通して黒タイ社会と文字との関わりの概観が示され，続く「年代記」で，黒タイ社会において継承されている各種年代記『クアム・トー・ムオン』『クアム・ファイン・ムオン』『タイ・プー・サック』の文献学的情報が説明され，同じく黒タイの首領達の事績を記した年代記であっても，内容のみならず，記述スタイルや用途が異なっており，『タイ・プー・サック』は数年に一度催される大祭礼で役職者達により唱歌される韻文作品であることが示される。最後の「カム・チョン版タイ・プー・サック」では，『タイ・プー・サック』の写本テクストの伝承者であり，著者の師でもあるカム・チョンの生涯及び本書の底本となる写本テクストの内容，形式などが述べられ，『クアム・トー・ムオン』との記述内容の比較から，相